

研究課題

# 心機融合と学びの連続で、児童の確かな学力の育成

副題

～人とICTのよさを活かし、学校と家庭の学習を連携させて～

学校名	岐阜市立本荘小学校
所在地	〒500-8333 岐阜県岐阜市批花町6丁目29番地
学級数	21
児童・生徒数	647名
職員数/会員数	41名
学校長	清水 優子
研究代表者	清水 優子



## 1. はじめに

本校では、21年度までの文部科学省の先導的な教育情報化プログラムによる取り組み成果発表を行った。

この研究成果をもとに校務の情報化を「学習の情報化」へ波及させると、児童に組み合う時間や教材研究や研修に費やす時間が増加すると考え、初年度は、主として「むり、むだ、むら」をなくし、教育環境整備を行った。22年度からは、「心機融合と学びの連続で、児童の確かな学力の育成」、サブテーマを「人とICTのよさを活かし、学校と家庭の学習を連携させて」とし、研究を進めることにした。

## 2. 研究の目的

どの子にも「わかるできる喜びを実現できる」ことをめざし、22年度からは児童の立場から振り返り、「確かな学力の育成のために、学習活動の改善」に重点を置いた。

### 心機融合と学びの連続で、児童の確かな学力の育成

～人とICTのよさを活かし、学校と家庭の学習を連携させて～



## 3. 研究の方法

研究を進めるにあたって、次の4方法を考えた。

- (1) 「学びの連続」の分析と捉えを明確にする。
- (2) 確かな学力の育成のために学習活動（授業）の改善を図る。
- (3) ICT活用法の作成と研修を行う。
- (4) 教科書を共通基盤とした学習をすすめる。

## 4. 研究の内容と経過

### (1) 「学びの連続」の分析と捉えの明確化

学びの連続について次のように定義づけた。

基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得し、これらを活用する力を身につけるには、児童ひとりひとりが学習課題を把握し、自ら調べ考える中で、既習の知識や経験と関連づけて解決に至る学び方を習得することが大切である。これは、学校の授業時間のみに限るものでなく、家庭と学校における学習活動が相互に関連し合い、連続する時に形成されると考える。これが学びの連続である。

さらに具体化して、「学びの連続」を①学校における学習活動の連続②家庭と学校での学習の連続の2つに大別した。

#### ① 学校における学習活動の連続

学校における学習活動の連続を「家庭と学校」をつなぐものだけでなく、「学習内容の連続」と再認識した。また、

- ・教科書を共通基盤として単元を通じた連続
- ・学習活動を共通基盤として既習学習と本時、次時との連続

- ・他の単元、他の領域との連続

に類別して、学習活動の改善の足がかりのひとつにした。

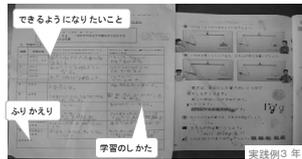
## ② 家庭と学校での学習の連続のために

- ・学習計画表を作成、家庭学習に役立てる
- ・教科書を中心とした家庭学習をすすめる

児童が家庭での学習に意欲的に取り組めるためには、「何を」「どのように」学習したらよいかを理解する必要がある。そこで、「学習計画表」を作成して学校でも家庭でも活用し、教科書を中心とした家庭学習を推進した。

### 1 「学びの連続」の分析と捉えの明確化

- ②家庭と学校での学習の連続
  - ・学習計画表を作成、家庭学習に役立てる
  - ・教科書を中心とした家庭学習



## <3年生の事例>

3年生は「家庭学習、何やったらいいの」と悩む子が多い実態から、学習の見通しが持てるように各自で学習計画表を作成し、家庭学習を行っている。授業では、「ここは分かっているから、みんなに説明しよう」「分からないからよく聞こう」と集中して取り組み、分かるようになり学習が楽しくなると、児童は答えている。

## (2) 確かな学力の育成のために学習活動（授業）の改善

22年度の授業改善ポイントとして下記のことを考えた。

### ①「とりあえず使う」から、ねらいを明確にしたICT活用と板書を融合させた授業へ

児童を惹き付けるには、大型テレビやスクリーンは効果的ではあるが、単発的な提示になりがちである。そこで児童の思考の流れを支えるものとして「板書とICT」を融合した授業を展開した。

### ②教科書に沿った授業から活用した授業へ

教科書だけでは内容理解が不十分な児童への、指導や援助を行うために具体物の操作活動を取り入れたり視覚や聴覚に訴えたりして、より理解できやすくした。さらには、既習の問題を取り入れることで、要支援児童にも、理解できた。

### ③学習活動の展開方法～自己評価に加え、教師による個の活動の見届けと価値づけ～

学力の定着を図るために、自己評価と教師による評価の時間を設けた。また、学習展開方法を2形態考えて、「学び合いに重点」では、仲間と学び合う時間を確保し「個の学習に重点」では、評価を早い段階で行い、習熟に力を入れるなど指導計画段階で軽重をつけた。

### 2 確かな学力の育成のための授業改善

#### ① ICTと板書を融合させた授業



### 2 確かな学力の育成のための授業改善

#### ②教科書に沿った授業から活用した授業へ

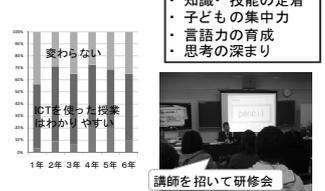


## ④目的に応じたICT活用

児童には、ICTを使った授業は、分かりやすいと好評である。特に、知識や技能の定着や児童の集中力を高めたり思考の深めたりを期待する場合は効果的だと考える。

### 2 確かな学力の育成のための授業改善

#### ④目的に応じたICT活用



## (3) ICT活用法の作成と研修

21年度までに、全教室にノートパソコン・液晶プロジェクター・スクリーン・大型テレビ・デジタル教科書（国語）を設置したり、校内3カ所にパソコンとプリンターを置き、児童が自由に学習プリントを取り出したりして、効果的な学習活動に取り組めるように環境整備を行ってきた。

行った研修は次のとおりである。

### ①繰り返し学習ソフト「リビラン」の活用

これは、岐阜市教育研究所から提供していただいたもので、フラッシュカードのように指定した速さで提示される画面を見て学習する教材である。教室のPCに簡単にインストールして大型テレビに映して学習できる。研修会では、容易く問題を増やしたり作り替えたりすることも勉強した。

### ②ICT 機器の操作方法と「ICT を活用した学びの連続」についての効果的な活用法

普段から、効果があつた ICT 活用について学年で、交流してまとめたものを持ち寄り出し合い広めた。また、研修を通して、「目的の明確化」についても共通理解した。

### <1年の実践例> 学習習慣における ICT 機器活用

テレビ画面に S-tation の今日の予定を映し、待ち受け画面をよい姿のスライドショーにする。児童は、この画面を見て担任の読み上げる明日の予定を聞きながら、予定帳を書き終えて、帰りのカバン片付けをする。S-tation の音楽をかけるようになってから、残り時間がどのくらいあるか、画面を見ることもできるので、急いで片付けるようになった。



## (4) 教科書を共通基盤とした学習

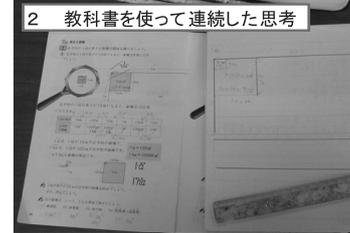
教科書を活用した学びの連続については、次のように考えてきた。

教科書は自主学習ができるように編集されている。そのため、教科書のよさを活用するならば、児童ひとりひとりの学習は学校の授業時間だけでなく、家庭で教科書を使って学習することで、家庭と学校での学習を連続させることが重要であると考えている。

- ・家庭では、教科書をもとに個人でまたは、家族と一緒に学習する。
- ・学校では、教科書をもとに ICT を活用し、先生や友達と一緒に学習する。さらに、教科書を活用した学習計画表を作成する。

教科書を活用した家庭学習の習慣化をめざして、学級活動での「家庭学習の指導」にも、取り組んできた。また、学校での学習活動では、「偉大なるワンパターン」といわれた昨年度からさらに踏み込んで、教科書をなぞって考えるのは自主学習では大切だが、学習活動（授業）ではそれだけではないはずであることを再確認し、教師の指導力向上に努めた。

成果 心機融合と学びの連続で、児童の確かな学力の育成



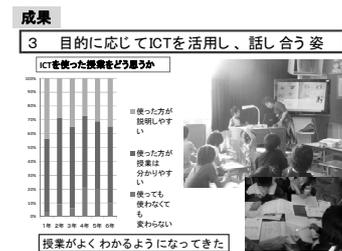
## 5. 研究の成果と今後の課題

### <成果>

2年間取り組んできた成果は次の3点である。

- ① スクリーンと大型テレビ等 ICT と板書の併用で、「発言」から「話し合い」へと質の変容が得られ、教師も目的に応じて授業作りができた。
- ② 教科書を使って連続した思考ができるようになった。児童の中には「私の教科書」と愛着を持って、自主学習や家庭学習に意欲的に取り組む子も見られるようになった。
- ③ 目的に応じて ICT を活用し、話し合う姿が見られ、授業内容がよく分かるようになってきたと答える子が増えた。

日常的に活用することにより、ICT 機器は教師にとっても児童にとっても黒板と同様の道具となってきた。児童の意識も全学年で、使ったほうが授業が分かりやすいと答え、さらには使うと説明や話がしやすいと答えている。



### <課題>

算数のテスト結果でみる「わかるできる喜び」

学年(該当者人数)	楽しい	普通	楽しくない
1年	該当者なし		
2年	1	1	
3年	10	6	2
4年	9	6	3
5年	3	3	1
6年	4	8	2

左記の表は算数テストで 60 点以下の児童に聞き取り調査をした結果である。60 点以下の児童が「わかるようになったか。できるようになったか」ということだが、半数以上が

楽しいと答えている。その理由としては、

- ・一生懸命にやっていると分かるからうれしい。
- ・班学習での教え合いが楽しい。
- ・自分の生活に使える。
- ・分からないところが分かる。

一方、楽しくないと答えた子は、「授業で分かっても、テストの点が悪いと楽しくない。」と答えている。この児童の言葉に象徴されるように「定着の難しさ」が分かってきた。そこで、

- ・評価が曖昧で、それを活かした指導援助が不十分である。児童が意欲的に取り組めるようになる評価の在り方を研究する。
- ・教えるべきことと考えることを明確にし、学習活動の充実を図る。
- ・ICT や教科書について、これからも有効な活用方法を究明する。

この3点について、考えていきたい。

## 6. おわりに

ICT環境整備が整い、教師が日常的にICTを活用して学習活動に取り組むようになってきただけでなく、児童も学習や生活の中にICTを取り入れる姿が見られるようになってきた。ICTの活用が児童に及ぼす影響力の大きさを改めて感じている。23年度は、さらに掘り下げて「児童がわかる・できる」授業改善に取り組んでいきたい。